

# 評価とは 学びを活かしてプロジェクトを改善する



Profile



たなか ひろし ● 1995～2006、NPO 法人ヒマラヤ保全協会の森林保全事業に従事。英国サセックス大学開発学研究所修士課程で参加型評価を研究。2009より現職。日本評価学会認定資格評価士。  
nepalippine@gmail.com

著・田中博 参加型評価ファシリテーター

## まだNGOに身近ではない評価

日本のNGOがさらに成長し、社会の期待に応えていく鍵は「評価」にあると考えている。NGOを通じてネパールの森林保全に長く携わったことがあるが、プロジェクトで困難に直面した際、評価を行うことで克服して目標を達成してきた。この経験から評価の重要性を痛感し、英国の大学院や評価学会で専門的に評価を学び、日本初の参加型評価ファシリテーターとして独立。現在NGOが途上国で行うプロジェクトや組織評価の

お手伝いをしている。

その中で感じるのは、定期的な評価が主流になってきている海外のNGOと比べ、消極的な団体が多い日本の現実である。しっかりと評価を行うNGOがある一方、まだまだ評価に関して「他人から非難される」「NGOの成果は評価できない」といった誤解や、お金や人材不足などの懸念から評価を躊躇する団体も少なくない。

## 評価は価値を発見・改善するもの

本来評価とは「改善」に繋がるポジティブ

か・なぜ上手くいったのか、そして課題は何だったのか・その原因は何かという教訓を「学び」、それを活かしてプロジェクトをより良くすることができる。評価(Evaluation)とは文字通り、価値(Value)を取り出す(Extract)、すなわち価値を発見することである。

## NGOは参加型評価が向いている！

私の専門である「参加型評価」は、主に外部の専門家が事業の詳細を調べて成否を判断する従来型の評価と異なり、スタッフや住民など「当事者」が活動を振り返るといった特徴がある。評価者はそれが適切に進むようにファシリテーターの役割を担う。

NGOの活動はODAのようなインフラ整備などよりも、教育や人材育成といった人の意識や行動にはたらきかけ、複雑な変化を経て成果を出す「プロセス型」プロジェクトが多い。建物を造る事

業では、目標値(建築数)に対し客観的な達成度を測ることが可能だが、人の意識・行動の変化を数値化して計測することは難しい。専門家の判断を当事者が改善に結びつけることも困難である。

しかし参加型評価であれば、プロジェクトに関わっている当事者が変化の過程を振り返るため、実態を深く理解して、皆が納得する成果と課題を学ぶことができ、さらに当事者意識の高揚や能力開発を通じて改善につなげることができる。

これはNGOのプロジェクト評価に適していると確信している。私が評価に関わったNGOの方々からも「スタッフのモチベーションが上がった」「成果と課題が共有され、プロジェクトの今後が見えた」と喜んでいただいている。

参加型評価の手法も、最近非常に洗練されてきている。海外のNGOで使われている「Most Significant Change (MSC) 手法」は、現場で起こった「変化」に対し、様々な人々の視点を集め、「最

ブなもので、良い評価を経験すると楽しさがわかる。評価の目的は「学び」と「説明責任」の2つといわれているが、前者は事業を振り返ることで教訓を得て改善に活かすことであり、後者は援助の効果や目標達成度などを測って支援者など利害関係者に報告することである。

NGOにとって「説明責任」は必須だが、「学び」も同様に大切と考える。国際協力が携わる方はご存じのように、慎重に計画されたプロジェクトでも現場では日々問題が発生し解決を迫られる。事業を振り返る中で、それまでの成果は何

も重大な変化」を皆で議論しながら選び、要因や背景を分析する。MSCにより、計画にない想定外の変化を把握したり、改善につながる教訓を得る事に成功していると聞く。この手法は日本のNGO活動の評価でも有効であり、広めていきたいと考えている。

## 価値の発見でプロジェクトを改善しよう！

私は「2020年には日本のNGOの8割が定期的な評価を行う」という目標を掲げている。NGOが、評価による学びで事業や組織を改善し、その結果と過程を還元することで支援者の理解を得て団体への信頼も高まる、という良い循環を作りたい。また参加型評価は専門家だけでなく、少しの時間と手間をかければ誰でも質の高い評価ができるようになる。価値を発見してプロジェクトを改善したいNGOの皆様は、ぜひ私に声をかけていただきたい。